

今後、出来るだけ各群れを追跡して構成を明らかにして、餌付け群の増減期や飽和期の構成と比較をして、東丹沢の各群れがどのような変動期に当たるのか分析を試みたい。

#### 計画：1-3

##### 野生ニホンザル個体群に対する有害駆除の影響

羽山 伸一・小西 綾子  
(日獣大・野生動物)

羽山ら(1991)は、有害鳥獣駆除で滋賀県においてオリ捕獲された野生ニホンザルの性・年齢構成を調査し、地域個体群からランダムに捕獲されていないことを明らかにした。

本研究では、福井県若狭地方でおもに射殺によって捕獲された野生個体を回収し、その性・年齢構成、繁殖状態、栄養状態などを分析し、有害鳥獣駆除が与える個体群への影響を考察する。

今年度は、30頭の個体を回収し、性および年齢区分を確認し、現在、絶対年齢および繁殖状態などを分析中である。

性別は、オス13頭、メス16頭、不明1頭であった。また、年齢区分は4才以下の個体が4頭、5才の個体が1頭、6才以上の成獣が25頭であった。

この結果は、羽山ら(1991)の結果よりもさらに成獣ならびにメスの比率が高く、個体群に対する捕獲圧のかかり方が、いっそう特定の性・年齢に片寄っていることを示している。

#### 計画：2-1

##### 兵庫県におけるニホンザル分布の実態調査

清水聡(福井県立大・看護短大)  
三谷雅純(兵庫県立人と自然博・生態)  
武田庄平(東京農工大・一般教育)

兵庫県のニホンザル分布については、清水と武田(準備中)によるアンケート調査から、その分布の概要が知られている。その内、豊岡市周辺の集団は、近年になってその存在が確認された、新しく出現した(移入した?)可能性の高い集団である。清水らは、現地における聞き込みを中心に、この集団の現在の観察可能域と農作物への被害状況の季節変化を調査した。

観察可能域は、豊岡市、城崎町、竹野町にまた

がり、およそ70kmにおよぶ。一回の観察頭数は常に数頭程度であり、集団は小さな集まりに別れて広域を広く移動していることが推定できる。また、農作物への被害は特定の作物に限定できず、この集団は作物が畑であれば何でも食べるという行動を示す。ただし、イネへの被害は聞かなかった。また、多くの人がコザルの姿を目撃しており、現在のところ、一定の個体数復原力は保持しているものと思える。

豊岡市をはじめ、兵庫県但馬地方は積雪量の多いことで有名であるが、この冬の積雪のために元来はより海拔高度の高い地域にみられるブナ林が海拔300mほどから認められ、一方、谷沿いの植生はより海拔高度の低い地域にみられる植生が上部地域にも進出している。(ただし、豊岡市周辺では、人為的な影響からすでに潜在自然植生の照葉樹林は代償植生のコナラ林におき変わっている。)豊岡市周辺のニホンザル集団は、しばしば谷沿いを移動しているものと思えるが、彼らの土地利用はこのような但馬地方の植生分布に深い関係を持つことが予想できた。また、豊岡市周辺以外の但馬地方でも、人々は「サルは谷沿いに住む」という認識を持っており、今後、より具体的なニホンザルの土地利用と植生分布の関連は、重要な調査対象であると思える。

豊岡市周辺のニホンザル個体群をはじめ、但馬地方一帯のニホンザルは、いずれも小さな単位に孤立して分布しており、たとえ地図上でみる分布域は広く見えても、各集団の行動域が「異常に」大きいために、実際の個体数サイズはきわめて小さいことが予想できる。今後は、保全生物学的観点を取り入れた調査が必要である。

#### 計画：2-2

##### 大分県のニホンザルの生息分布および生息地の環境変化と猿害

長岡寿和(大分短期大学)

野生ニホンザルによる農林業作物への被害は大分県全域に及びつつある。そこで、大分県の野生ニホンザルの生息分布域と生息地の環境変化を年代ごとに調査している。

全国的なニホンザルの生息地の調査は1923年に長谷部言人がアンケート調査したものが最も古いとされている。このときの報告は岩野泰三〔に

ほんざる4、1974]によってなされている。大分県では現在の本匠村や耶馬溪町など8市町村にその生息が示されている。1920年代のニホンザルの生息に関する情報は大変重要な資料となるが、関係者の手元にあるその情報量についていえば極めて乏しい。

そこで、1923年当時の生息地に該当する市町村について、それぞれ集落単位（地名で小字レベル）で70才以上の男性を対象にアンケート調査した。その目的は1920年前後の年代のニホンザルに関する住民の記憶を情報として収集し残すことにある。今、老人の記憶を書きとどめておかなければ、1920年代当時のニホンザルの生息状況は、推測さえできなくなってしまうからである。この意味では大分県だけでなく全国的な情報収集の必要性を感じる。

我々の行った調査の内容は以下の通りである。

1. 地元であなたが初めてサルの群れを見た年
2. 地元で初めてサルの群れによる被害を受けた年
3. 地元でサルの群れによる被害を頻繁に受け始めた年
4. 初めてサルを見た年、それはどこで見たか
5. 被害を受けた作物

これまでのアンケート調査は大分県の本匠村および耶馬溪町のほぼ全域と、米水津村および弥生町の一部を終えた。

環境因子については生息地周辺の市町村ごとの開設された林道距離、人工造林や森林伐採面積など林業関係の記録を、部分的ではあるが1940年代まで調査できた。さらに環境変化について、航空写真からも、このデータとあわせて生息分布域周辺を年代ごとに解析したい。

#### 計画：2-3

日光における厳冬季のニホンザルの採食量と食物供給量について

小金沢正昭（宇都宮大・農・演習林）

栃木県日光市の低標高域に生息する野生群3群を対象に、スキャンニング法による採食量と植生調査による食物供給量の推定を行った。対象とした群れは、いずれも成獣メスに装着したテレメトリ送信機によって識別され、その行動圏と土地利用を明らかにした。今回用いたスキャンニングは、

15分間隔で行い観察できた採食食物ごとにその回数を記録し、採食量の指標とした。調査は、93年11月から94年3月にかけて24日間実施し、合計451回スキャンニングした。このうち、501回の採食を記録し、記録した食物は101品目（種部位別）であった。上位5品目は、コナラ（堅果）67回（14%）、タケsp（葉）39回（8%）、イネ科草本（葉）37回（8%）、シロツメクサ（葉、茎）34回（7%）、だいこん（農作物）34回（7%）で、全体の42%を占めた。また、上位10品目は全体の60%を占めていた。当地域の低標高域に生息するニホンザルの食性は高標高域の群れと比較すると、きわめて多様であった。しかも、生息環境の違いを反映して高標高域では見られないコナラ（堅果）や農作物が上位を占め、高標高域で優占牧草類（シロツメクサ）は少なく、樹皮、冬芽の採食は少なかった。なお、本研究は、今木洋大（東京農工大学・自然保護）との共同で行った。

#### 計画：2-4

島しょ性を視野に入れた金華山ニホンザルの生態学的育成の研究

伊沢 紘生（宮教大）

遠藤 純二（東浜小）

金華山には野生ニホンザル6群、計250頭ほどが現在生息している。そのうち1群は島の北部に遊動域をもつC群が最近分裂してできた群れである。かつて1群であった金華山の群れがどのような経過を経て5群になったかは、すでに資料を整理し復元を試みているが、今回の分裂の経過を追うことで、島という閉鎖環境の中で生起する群れ分裂のメカニズムに関する貴重なデータを得ることができた。一つの大きな知見は、分裂は個体数の増加とは必ずしも関係していないということである。この分裂に関しては、さらに追跡調査をする予定である。

これまで12年間の、金華山のサルのメスの初産年齢、出産間隔、寿命などに関する資料が、かなりの程度まで整理できた。それらは、同緯度内陸部のサルたちに関する資料との比較検討されている段階だが、おそらく島という閉鎖環境が関係しているものと思われる。初産年齢が7~8才と遅いこと、出産間隔が3年前後と長いこと、一方